

ITと鉄道



(財)鉄道総合技術研究所
理事長 副島 廣海

しばらく前の話ですが、情報化社会が進んだら人やモノの流れが減って、旅客輸送や貨物輸送は大きな打撃を被るのではないか、と真剣に云われた頃がありました。確かにその頃はテレビ会議が盛んにPRされ、出張はもう要りません、居ながらにして事が進むのです、バーチャル出社が出来るようになるのです、等と云われたりしました。しかしそれで旅客輸送が減ったら大変、やっぱり人には移動してもらわなければいけないということで、会うのが一番、などという宣伝文句が使われたりしました。

実際にそれから多くの年月が経ちましたが、情報化社会になったから人の輸送が減った、ということにはストレートにはなっていないようです。今の若い年代が情報化社会の寵児のようにいわれる携帯電話を使っているところを見ても、内容を聞けば「もうすぐ着くからね」とか「遅れてしまってゴメンね」などと話しています。「緊急性もないのに何で高いケイタイを使って話をする必要があるんだろう。誰が電話代を払っているんだろう」なんていう余計な心配は別として、情報を沢山かつ早く持つことと実際に面と向かって意志を通じ合うこととは、やっぱり別のことのようにです。物流の世界でも、情報が通じやすくなったために物流が増えた例として、花のデリバリーサービスが紹介されたりしました。

そっちの心配がひとまず無いとすると（安心してはいませんが）、今度は今流行りのIT。サミットのテーマになったり担当大臣が出来たりする世の中だから鉄道の世界も乗り遅れるわけには行かない、じゃー一体何をやるべきなんだろう、ということになります。

世の中のITといえば、インターネットやe-コマースから次世代携帯電話、家庭用ゲーム機などいろいろなキーワードが風靡しています。自動車や航空の世界でも、主として安全性を向上させるためとか利用者に対する情報提供の面でITを利用しようとしています。よく引き合いに出される例としては、自動車交通のITSがらみで、高速道路に入ったらハンドルから手を離して自動運転が出来るようになるとか料金所を停まらないで通過できるようになるとか、いろいろ将来は便利になるようです。

一方、鉄道との関係といえど何でしょうか。豊富な情報を正確に早く伝達・利用するとか、いま迄なかった情報が得られるようになる、一方方向だった情報が双方向になるといった観点から見れば、鉄道の世界でも、例えばデジタルATCなどはまさにITの成果物でしょう。またこれからのテーマとしても、災害に関する情報を出来るだけ早くキャッチして列車の運行にフィードバックし安全を確保する手段とか、線路上にある障害物を検知してそれを早く列車側に伝える手段とか、道路と鉄道の接点である踏切の制御をどうしたらいいとか、いろいろな面での技術開発が期待されるようです。

もう一つ、情報通信技術の格段な進歩を利用して、人、輸送機器、交通インフラの間の連携をよくしようという提唱もあります。今までは鉄道なら鉄道、バスならバス、航空機なら航空機、それぞれがその中で便利になりつつありますが、どうもそれらが一つになっていない所が弱いところです。A点からB点に行くのに何を使って行ったら安くて便利なのか、ましてや事故とか災害でどこかが不通になったとき、何を使ったらどのくらいの時間と費用でいけるのか、そんなことがいっぺんにしかも何処にいても自分の移動端末から判るようになれば、これは便利でしょう。

いずれにしてもこれからのITは、企業の立場で進めるもの、利用者の立場から見たニーズに起因して進めるもの、それに必要とあれば国の立場から進めるものといろいろあると思われませんが、これらがうまくかみ合って始めて効率のいい成果が期待できるものと思われます。